Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-05

新出本『奥の細道』の性格 : 底本修正問題をめぐって曾良本へ

中森, 康之

(Citation)
國文論叢,26:14-28

(Issue Date)
1998-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011816

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011816

KOBE UNIVERSITY

新出本『奥の細道』の性格

―底本修正問題をめぐって曽良本へ―

中森康之

一　何となくのイメージ

この一年ほどの間、マスコミなどで取り上げられているうちに、新出本『奥の細道』にはあるイメージが付着してしまった。

これこそもとの『奥の細道』だというイメージである。もちろん誰もはっきり主張してはいない。

しかし例えば週刊誌などで、ホンモノかニセモノかと騒がれた。この時のホンモノとは、厳密には芭蕉真筆という事だけを意味するはずなのに、なぜかそれ以上のニュアンスを含んでしまっていたのである。

実はそれは、スクープ当日（平成八年十一月二五日）から既に始まっていた。

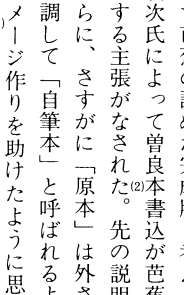
ＮＨＫニュースは「発見！自筆原本」。翌日のクローズアップ現代（ＮＨＫ）も「発見〝奥の細道〟自筆原本～芭蕉創作の秘密に迫る～」と題して放映された。新出本は「自筆原本」と呼ばれたのである。(1)

その午後七時のＮＨＫニュース。インタビューで櫻井武次郎氏が次のように述べられた。

今まで底本として活字翻刻などされていた『奥の細道』の本文は、これによって修正される……、されなければならないだろう。

では今までの『奥の細道』とは何だったのか、一般には、そう思った人も多いだろう。しかしそれについてはクローズアップ現代で詳しく説明された。

従来『奥の細道』の写本は主に三つが知られている。曽良本・西村本・柿衛本。最も古いのは曽良本。これは、芭蕉自筆本を弟子が書き写し、それに芭蕉自身が加筆訂正したもの。これまで芭蕉自筆本の行方が分からなかったため、この曽良本が最も原文に近いものとされてきた。西村本・柿衛本は曽良本を写したものである。今回の本はその曽良本のもとになった芭蕉自筆本である、と。



これまで一般に読まれてきたのは他人による写しで、今回発見されたのが芭蕉自筆の原本というわけだ。もちろん「原本」というのは書写関係上の呼び名である。これが持つ本文が、正しい本文だという意味ではない。しかし、新出本は芭蕉自筆原本で、それによって底本を修正できるのだと聞けば、誰でも新出本こそ最も正しい本文を持つものだと思うのではないだろうか。

なお少し補足しておくと、従来底本とされてきたのは西村本である。これは素龍が清書したものだが、芭蕉自身が題簽（＝表紙のタイトル）を書き、最後の旅に携帯した。その途中、兄半左衛門に贈られ、のち遺言によって去来に譲られたものである。したがって芭蕉の認めた完成版と考えられてきた。ただし、近年、村松友次氏によって曽良本書込が芭蕉筆であり、曽良本こそ定稿本だとする主張がなされた[2]。先の説明はそれに依っている。

さらに、さすがに「原本」は外されたものの、自筆であることを強調して「自筆本」と呼ばれるようになった[3]ことも、何となくのイメージ作りを助けたように思う。新出本ははじめ文字通り「新出本」[4]と呼ばれたり、「芭蕉自筆草稿本」[5]と呼ばれたりしていたが、すぐに「自筆本」と呼ばれるようになった。複製は『芭蕉自筆本　奥の細道』[6]。岩波普及版は『芭蕉自筆　奥の細道』[7]という。

もちろんそれは自覚的に用いられたものである。

ついでに、新出の『奥の細道』を、わたくしたちが「芭蕉自筆本」「自筆本」と呼ぶのは、単純に本文の筆写者としての把握である。所蔵者名をつけようにも、中尾松泉堂は書店であり、現在もこの書物は純然たる商品である。

売り物であるから、中尾氏もいうように、条件が整えばいつでも所有者が変わる。それがわかっているのに書店名を本の名称に冠するのは例がない。そこで「芭蕉自筆本」としておけば、将来にわたって無害であろうと推測したしだいである[8]。

しかし残念ながら、「自筆本」という呼び名は、「単純に本文の筆写者としての把握」を越えてしまったのである。

これは多くの関心をひいたという意味ではよかった。しかし今となっては、逆に、新出本の性格を曖昧にし、新出本をめぐる議論を曖昧にしてしまっている。

例えば真偽問題。もしこのようなイメージがなければ、議論がもう少し具体的に進んでいたはずだ。

あるいは櫻井氏いうところの底本本文の修正。これもきちんと議論されることなく、曖昧なまま支持されつつある。

しかしこれは、本来もっと議論されてしかるべき問題であるはずだ。

本稿ではこのあたりを手がかりに新出本の性格を確認してみることにしたい。

二　何となく櫻井説

まずは櫻井説[9]の確認。それは次のような発想から出たものだ。

芭蕉は、自らいったん『奥の細道』の清書をしたが、縦横無尽の訂正をなしたために、改めて誰かに写しなおさせた。それが、現在「曽良本」と称されるものである。そして、手元に返ってきた「曽良本」を、芭蕉自身で誤写を直したり（朱と墨で数度訂正する）、何度目かの推敲を加えたりして、素龍に渡して清書を委ねたのであったろう。その際、誤写の生じないように、分かりにくい文字に読みなどの注記も加えておいたのである。しかし、人間のすることである、例えば、「象潟」の「いかなる故ある事にや」（第二二丁裏）が「いかなる事にや」、「敦賀」の「葦を刈」（第三〇丁表）が「草を刈」と写されたまま放置されているなど、芭蕉の見落としも生じていた（曽良本書写子の誤写の方が結果的によかったと判断して訂正しなかったとは考えにくい）。自分の文章であるほど、文字を合わせずに読んでしまって誤りに気づかずましてしまうことは、現代の私たちが校正をする時にも経験するところであろう[10]。

さらに《鼎談》では次のようなやりとりがあった。

（田中）ただ、本文的には、これが出てきても曽良本が定稿本であることは動かないわけで、よるべきものは曽良本ですね。芭蕉が曽良本に手を入れて直しているわけですから、最終的には曽良本が最終的な決定稿になるわけですが、少なくとも芭蕉自筆本であるということの価値はそういうことと全然関係なく、大変なものだと思います。

（櫻井）曽良本は前からも言われていたように、芭蕉の決定稿だということです。しかし、曽良本に誤写のあることも分かりました。曽良本の誤りがただせられる。

（田中）写し違いがありましたね。「いかなる故あることにや」の「故ある」を曽良本では書き落としている。

（櫻井）そのほかにも、幾つかあります。

そして本文修正論が主張される。

（櫻井）これ（新出本――注）があるからということで変わるだろうという曽良本、柿衛本、西村本との関係をもういっぺん洗い直し、テキスト・クリティックが必要だと思います。最終稿の芭蕉の原稿が残っているわけじゃないんですからね。そうすると曽良本の誤り、柿衛本の誤り、西村本の誤りというのがあるわけですから、それをもう一度検討して、一番正しい本文をつくってみたいとおもっています。

「一番正しい本文」とは、「芭蕉の意図した本文[11]」のことである。もちろん櫻井氏は新出本の一番表面上の本文（以下表面本文という）が、そのままで「一番正しい本文」だと考えておられるわけではない。曽良本に芭蕉自身が書込をしているからだ。しかし、

そのとき、芭蕉が誤写を見逃した箇所がある。[12] それが新出本によって修正できる、そしてそれによって、「芭蕉の意図した本文」が復元できる、というのだ。

この考えは、すぐに教科書の本文訂正として新聞に取り上げられた。[13] それ以後、これといった異論も出ないままに、何となく支持されつつあるのである。[14]

例えば尾形仂氏。氏は「野坡本（＝新出本――注）出現の意義」を五つ挙げておられる。[15] 引用は第三から。

> 第三に挙げられるのは、従来、いわゆる曽良本は完成以前の芭蕉の草稿を忠実に写したものと考えられてきたわけですが、今回出現した野坡本はまさにその曽良本の親本に当たるものであることが明瞭になり、そのことによって、芭蕉自筆草稿から曽良本・柿衛本・西村本へと、推敲と誤写の両方を含みながら本文が展開し定着してゆく過程が、これまで以上に詳細にたどれるようになったことです。
>
> その結果、第四に、これまで『おくのほそ道』の最終決定稿として尊重され広く親しまれてきた素龍清書本（西村本）の本文についても、多少の補正を必要とすることになってきました。

あるいは石堂秀夫氏。

> 実は、従来の定本の西村本には七カ所の誤写があることが判明した。これによって、学校の教科書から、その他数多く出版されている『奥の細道』の研究書は、少なくとも誤写の部分の訂正を余儀なくされることだろう。[16]

ただし尾形氏も石堂氏も、なぜ本文修正が必要なのかは述べておられない。[17]

しかし、何かおかしいと感じないか。櫻井氏によると、芭蕉による曽良本への書込は、最低三回に渡って行われているのである（一回目が朱、二回目・三回目が墨による）。[18] その間芭蕉自身が一度も訂正しなかった箇所を、新出本が自筆だという理由だけで修正できるのだろうか。

それは単なる芭蕉の見逃しであって、よくあることではないか、そう言われるかも知れない。が、それは違う。曽良本書込に「誤写を見逃す」ということは存在しないのである。

なぜか。

三　曽良本書込の意味

それを証明するために、次の五つの点について、調査した。

（曽良本本文→曽良本書込）

A　写し間違い→新出本本文に戻す[19]
B　写し間違い→新しい本文を作る
C　写し間違い→書込なく放置する
D　正しく写す→新しい本文を作る
E　書込によって漢字・仮名など表記を訂正した箇所、読みなどの確認のためと思われる書込（生涯の「涯」の書込など）

※「写し間違い」とは、新出本表面本文と曽良本本文が異なっているという意味である。したがってCは二一頁①～⑩のような、特に問題ないものも含む。

調査結果は次の通りである。

A　一五ヶ所（朱八・墨七）
B　三ヶ所（朱一・墨二）
C　二二ヶ所（うち、特に問題ないのが十ヶ所）
D　一二五ヶ所（朱一八・墨一〇七）
E　五三ヶ所（朱二一・墨三二）

櫻井氏がいう誤写直しはA。Cは見逃し。BとDが推敲。Eは本文の異同ではない。

さてこの数字は何を物語っているのか。

まずは一回目書込にあたる朱の書込。Aは八ヶ所。それに対して見逃し（C）が二二ヶ所（特に問題のない箇所を引いても一二ヶ所）。

こんな杜撰な誤写直しがあるのだろうか。

墨の書込を含めても、A一五、C二二（一二）。

それに対し、Dつまり、曽良本が正確に写したにもかかわらず芭蕉が書込によって新しく別本文を作ってしまった箇所が多い（特に墨は圧倒的）。これは何を物語っているのか。

曽良本書込は、校正（＝誤写直し）ではなく、推敲だというこ

とである（ただしEを除く）。もちろん今日でも、多少の推敲を含んで校正と呼ぶ。だから言葉はどうでもいい。重要なのは、芭蕉は、誤写を直そうとしたことなど一度もなかったということなのである。

簡単に言おう。芭蕉は曽良本書込の時、新出本を横に置かず、フリーハンドで曽良本本文をチェックしている[20]。何を。文章そのものの出来を、だ[21]。

ではAはどうか。それでもAだけは、誤写直しと言えるのではないか。しかし結果的にそう見えるに過ぎない。

①（新）いつかは（1ウ）　※（新）＝新出本
（曽本）いつかわ（2オ）　（曽本）＝曽良本本文
（曽込）＝曽良本書込

②（新）岩窟に身を（4オ）③（新）きこえ（6ウ）
（曽本）岩　身を（4ウ）　（曽本）きこへ（8オ）

④（新）間に（7ウ）　⑤（新）枕ちかう（13オ）
（曽本）聞に（9ウ）　（曽本）枕ちかふ（16オ）

⑥（新）間に（14ウ）　⑦（新）江上に帰りて（14ウ）
（曽本）聞に[22]（17ウ）　（曽本）江山に帰りて（17ウ）

⑧（新）尾ふちの牧（15ウ）⑨（新）霜雪に朽て（16ウ）
（曽本）尾ふちの巻（19オ）　（曽本）霜雪に摧て（20オ）

⑩（新）　あやうきめにもあふへき日（17ウ）
（曽本）　あやふきめにもあふつき日（21オ）

⑪（新）　岩上の院々（18ウ）　⑫（新）　心をやはらけ（19オ）
（曽本）　岩歩院も（22ウ）　（曽本）　心をやわらけ（22ウ）

⑬（新）　奇石（26ウ）　⑭（新）　世にしらる功名の後（27オ）
（曽本）　奇名（30ウ）　（曽本）　世にしらる切名の後（31オ）

⑮（新）　十とせ余り也（28ウ）　※朱は②④⑤⑥⑦⑧⑪⑬
（曽本）　十とせ余りや（33オ）

どうだろうか。これらはむしろ、単なる語句や表記の訂正と見るべきではないのか。もちろん⑪などは誤写だと気付いただろう。しかし芭蕉は、これらの箇所が誤写だから訂正したのではない。その箇所の語句や表記がおかしかったから訂正したのだ。結果的に新出本と一致しているだけで、もし必要なら、別本文を作っても一向に差し支えなかったのである。

Bがその証拠である。

①（新）　城春にして・青々たり（16オ）
（曽本）　城春にして・青ミたり（19ウ）
（曽込）　城春にして草青ミたり

書込は朱。櫻井氏は「芭蕉自身、ここに誤写が生じていたと知った上で本文を改めたのか、知らずに改めたのか、知る由もない」[23]と述べておられるが、いずれにしても同じことだ。

まず「知った上で」なら、芭蕉は自覚的に新出本本文を捨てたことになる。つまりは、推敲。

「知らずに改めた」場合。それは芭蕉に、始めから誤写直しの意識がなく、新出本を参照しなかったことを意味する。芭蕉の意識はここに立ち止まっているのである。新出本を参照して誤写を直すつもりだったのに、それに気付かず「草」を補ったとは非常に考えにくい（もちろん可能性ゼロではないけれど）。

芭蕉は「青ミ」を「青々」に訂正せず、「草」を補った。それは「城春にして青ミたり」（曽本）ではおかしいと感じ、しかも「城春にして青々たり」（新）が最適だとは思いつかなかったからである。

意識的であれ、無意識的であれ、芭蕉は新出本本文を採用しなかった。芭蕉は、その時の感性によって、最良と思う文章を作っていたのである。

②（新）　さすかに打捨てかたく日々路頭の煩とな・るこそ（2ウ）
（曽本）　さすかに打捨てかたく・・路頭の煩とな・るこそ（3オ）
（曽込）　さすかに打捨てかたくて・路頭の煩となれるこそ

書込は両方とも墨。この箇所について上野氏は次のように述べておられる。

そして、この整形は、「日々」を含む「自筆本」の本文が

手近になくて、芭蕉自身も思い出すことがないままに、誤脱のある「曽良本」の本文に対してのみ行なわれたのではなかろうか、というのが、わたくしの推測である。[24]

もちろん「手近にな」かったかどうかは不明である。[25]しかし①同様、芭蕉は文章の違和感をなくすために「て」と「れ」を補った。そのとき芭蕉が頼りにしたのは、原稿ではなかったのである。

③（新）　仏頂和尚の山山居の跡有（5ウ）
（曽本）仏頂和尚の・山居の跡有（6ウ）
（曽込）仏頂和尚・・山居の跡有

書込は墨。ここも基本的には同じだが、新出本は「仏頂和尚の山」で改行があり、もともと芭蕉は（曽本）のように書こうとしていた可能性も大きい。[26]それを更に（曽込）が、「の」を省いたのは、文章のリズムを整えるためである。

以上見てきたように、曽良本書込に誤写直しという意識はなく、芭蕉は始めから推敲をしていたのだ。曽良本書込に誤写の見逃しが存在しないというのも、この意味である。

さて、ここから何が引き出せるか。まず、曽良本は新出本が未完成のまま写されたものであること。そして、それさえあれば、その原稿（＝新出本）はもはや不要だったということである。新出本は芭蕉には不要の本だった、一度はっきり、そう言っておいてよいのではないだろうか。

もちろんだから新出本そのものに価値がないというのではない。逆だ。何となくのイメージによって、新出本の性格を曖昧にしないためである。

では新出本の性格をどう言えばいいか。

四　新出本の性格

新出本の性格をはじめに規定したのは、よく知られた井筒屋版本奥書である。

又真蹟の書、門人野坡が許に有。草稿の書故、文章所々相違す。

このよく引用される奥書は謎に満ちている。日付がない、署名がない。あるいは引用部分の情報源。誰が野坡所持の本を「草稿の書」と認定したのか。「文章所々相違す」るのを確かめたのは誰か。去来か野坡か井筒屋か、あるいは芭蕉自身の言によるものか。またまた、なぜわざわざこのようなことを書いたのか。[27]

さて、現代においても、新出本は何度も草稿本と呼ばれた。しかしその意味はやや誤解を含んだものだったと言わざるを得ない。いつでも、夥しい貼り紙・訂正、あるいは各丁の行数の不一致[28]という、外見によって、そう呼ばれたに過ぎないからだ。

では本文はどうなのか。表面本文は、推敲の末、完成した本文なのか、それとも推敲途中の未完成本文なのか。[29]

はじめ「芭蕉自筆草稿本」と呼んだ櫻井氏も、訂正前の本文は推敲途中の本文で、表面本文は、一旦は完成された本文だと考えておられるようだ。

あるいは井本農一氏も新出本を草稿本と呼ばれたが、曽良本を「自分用の清書本（定稿）にするつもりだったと思われる」[30]と述べておられるので、やはり表面本文は一旦は完成されたものと考えておられるはずである。

これは当然のことかもしれない。推敲夥しい本があり、それを写した本も存在する。誰でも、完成したからこそ写させたのだと考えるのが自然というものだ。

しかし既に見たように、実際はそうではなかったのである。

新出本は未完成のまま曽良本に写された。その意味で、新出本は、表面本文までを含めて、まるごと草稿本なのである。[31]

その意味で、私は、新出本を「自筆本」ではなく、草稿本と呼んだ方がいいように思う。すでに誤解を含んで草稿本と言われている以上、あまり好ましいとは言えないが、それでも「自筆本」と呼ぶよりは、害が少ないのではないだろうか。「自筆草稿本」でもいいが、草稿本は自筆にきまっているのである。

さて、そうすると、新出本と曽良本との関係ももう一度考え直さなければならないが、しかしその前に、底本修正問題に決着を付けておこう。

五　本文は修正すべきでない

すでにはっきりしているが、底本本文は修正すべきではない。だが、今まで述べてきたのは、まだ一般論（＝原則論）に過ぎない。やはり具体的に見ておく必要があるだろう。

Aは曽良本書込と新出本が同一なので問題外。Bも既に見た。これらを新出本本文に戻すことなどありえない。

そして圧倒的に多いD。ここは曽良本本文が正しく写したにもかかわらず、芭蕉が手を加えたのだから、同様である。一番有名なものを一例だけ。

（新）　あなたふと青葉若葉の日の光（3ウ）
（曽本）　あなたふと青葉若葉の日の光（4オ）
（曽込）　あらたうと青葉若葉の日の光（「ら」は朱）

残るはCであるが、その前にぜひ言っておきたい。『奥の細道』の本文としてどちらが適当かということと、文章的に見てどちらが優れているかということは全く別の話である。修正すべきだという主張の裏には、そちらのほうが文章的（文学的）に優れているという判断がある。しかし芭蕉は、いつでも現代から見て優れている方を選択するとは限らないのである。[32]

まずは、特に問題ないものからあげる。

①（新）　道岨神（1ウ）　②（新）　かすに（1ウ）
（曽本）　道祖神（1ウ）　（曽本）　幽に（2オ）

③（新）　見るかこし（6オ）
（曽本）　見るかことし（7オ）

④（新）　栗といふ文字は栗の木と書て（7ウ）
（曽本）　栗といふ文字は西の木と書て（9ウ）

⑤（新）　道祖神（10オ）　⑥（新）　安直ス（16ウ）
（曽本）道祖神（12ウ）　（曽本）安置ス（20オ）

⑦（新）　和泉の三郎（13ウ）⑧（新）　漸々（2ウ）
（曽本）和泉三郎（16ウ）　（曽本）漸　（2ウ）

⑨（新）　断りなり（6ウ）　⑩（新）　漸々（15ウ）
（曽本）断なり（8オ）　（曽本）漸（19オ）

①から⑥までは、自筆本の明らかな誤りを訂正したもの。それ以降も特に問題ない。検討を要するのは次の例である。

⑪（新）　箕張（7オ）
（曽本）三春（8ウ）
※（新）の張り紙の下には「三春」という表記を使っているので、結構こだわっていたのかも知れないが、それほど強いものではなかったのだろう。

⑫（新）　物、影（7オ）
（曽本）物影（9オ）

⑬（新）　其後（15オ）
（曽本）其後ニ（18オ）

⑭（新）　緒たえの橋（15オ）
（曽本）緒とえの橋（18ウ）
※正しくは「緒たえの橋」。西村本は「緒たえの橋」。

⑮（新）　漸にして（17オ）
（曽本）漸として（20ウ）

⑯（新）　月山に登ルに（20オ）⑰（新）　俳詣（21ウ）
（曽本）月山に登ル（24オ）　（曽本）誹詣（25ウ）

⑱（新）　いかなる故ある事にや（22ウ）
（曽本）いかなる事にや（26ウ）

⑲（新）　年老たる（24オ）
（曽本）年寄たる（28オ）

⑳（新）　行末しらぬ旅路のうさあまり覚束なう（24ウ）
（曽本）行衛しらぬ旅路のうさあまり覚束なう（28ウ）
※上野氏によると「はるかなる行末をかゝえてかゝる病覚束なし」（新・九ウ）との対応上、「行末」のほうが味わい深いとのこと[33]。そうかもしれないが、芭蕉自身はそのことを強く意識してはいなかったはず。その対応をさせたいと考えていたのならそのままにするはずがない。

㉑（新）　俳諧（26ウ）
（曽本）誹諧（31オ）
※曽本良本では2カ所、俳諧が誹諧に訂正されている。
⑰同様ここも芭蕉は気付いてそのままにした可能性が高い。

㉒（新）　葦を刈（30オ）
（曽本）草を刈（34オ）

さて、これらの中に、原則（一般論）を曲げてまで、何としてでも修正しなければならないものがあるだろうか。

もちろん文章的に新出本の方がいいものもあるかもしれない。しかしそれは別の話である。曽良本書込の時、何度も本文を読んで、それでも違和感がなかったから直さなかったのである。それがその時の芭蕉の感性なのだ。

例えば㉒。もちろん芭蕉は曽良本本文を無意識に「葦」と思い込んでいたことも完全には否定できない。しかし同様に、「草」と読んで、なおかつ直さなかった可能性も否定できないのである。前者であることが完全に証明出来ない限り、いまさら私たちが修正すべきではないのだ。

もし定稿を「葦」に修正してしまったら、文章に対する芭蕉の感性やこだわりを議論する機会を、逆に奪うことになるかもしれないのである。[34]

もちろん、ある時期芭蕉がそう書いていたことの意味は大きい。しかしそれは推敲段階のある時期であって、その変更が誤写により生じたとしても、芭蕉自身の感性が許したのだから、「葦」を定稿として採るべきではないのである。必要ならこれらの箇所は、定稿に注記すればいい。しかしあくまで注記にとどめるべきである。

では結局『奥の細道』の定稿本は何か。もちろん曽良本（書込）か西村本である。どちらか。

現在は曽良本優勢。[35]もちろん十分な理がある。

しかし、実は西村本という考えも捨てがたいのである。西村本には誤写があり、曽良本書込が芭蕉自身による最終稿だとしても、である。芭蕉自身、本としてはあくまで西村本が完成本だと考えたから、自ら題簽を書き所持した。早い話が西村本の誤りは、芭蕉の許せる範囲だったのではないのだろうか。つまり西村本には、芭蕉にとってどうしても許せない誤りは、ない、のだ。[36]

それにもっと大事なこと。そもそも芭蕉に、決定稿という意識があったのかどうか。これが決定稿という一つを想定していたのか、それとも、俳諧なのだから、決定稿は複数あっていいと考えていたのか。[37]

これはもっと議論が必要だろう。ただ、本稿では、いずれにしても、その本文を、一箇所たりとも、新出本によって修正すべきではないということを確認しておきたい。

六　曽良本とは何か

最後に曽良本とは何か。新出本との関係でそれを論じておられるのは二人。いずれも決定的なものではない。私も先の検討を踏まえて、私見を述べてみたい。

まず井本農一氏。氏は次のように考えておられる。[38]

新出本は始め清書のつもりで書き始められた（第一次清書本）。しかしそこに手を入れたため草稿本になってしまった。そこでそれを自分用に清書してもらったのが曽良本（第二次清書本）。が、そこにも芭蕉は手を入れてしまった。そこでもう一度清書を思いつき、素龍に依頼した（第三次清書本）。

この考えが、新出本表面本文が完成本文であることを前提していること、「草稿本」というのが本文ではなく本の外見について言われていることは先に述べた。

この考えの特徴は、その都度清書を思いついたとする点にある。しかしこの考えでは、曽良本だけが半紙本であることの説明がつかない。そこをうまく説明しているのは櫻井氏である。

（櫻井）ここからは憶測なのですが、丁寧に清書したつもりでも、誤りが方々にできる。その上、見ているうちにまた手をいれたくなる。キリがありません。そこで、誰かに清書を頼みたいと思うが、訂正の多いこのままで渡すのも何だから誰かが写し直してくれないかということで、ちょうどその頃によく出入りしていた利牛かに頼んだ。（中略）さて、戻ってきた写本の中に読めていない字もある。芭蕉はチェックしていったのですが、その途中でまた筆を入れることになってしまう。それがいわゆる曽良本です。これだけが半紙本であるのも、仕上げの本ではないからです。[39]

新出本はひとまず完成したと芭蕉は考えた。井本氏と同じ。この先が違う。それを清書してもらおうと思うが、そのままでは汚くて気がひけるので、清書用の原稿を書いてもらった。それが曽良本。つまり曽良本は清書のための原稿だというわけである。

曽良本の段階で正式な清書が念頭にあったという点に関しては、私は櫻井説に賛成する。それだと曽良本だけが半紙本だということも説明できるし、曽良本の朱の書込は、そんな雰囲気を持っている。

ただし疑問が残る。新出本は完成本文ではないし、誤写チェックもしていないことは既に述べた。それに第一、新出本はそのまま清書を依頼するのが気が引けるほど、汚くないのではないか。もし芭蕉が新出本を清書したかったのなら、なぜそのまま清書原稿にしなかったのだろう。そのほうがよっぽど安全である。

既に見たように、芭蕉はあと一歩のところで曽良本を写させておいて、更に推敲を続けている。ということは、曽良本は、更に文章を吟味する（推敲）ための土台として写されたもの、ということになるのではないだろうか。

もちろん誤写は覚悟の上だったろう。しかし始めから手を入れるのは折り込み済みだったので、それほど神経質になる必要はない。更にフリーハンドで読んでみて、気になるところを直せばよかったのである。

ではなぜ新出本そのものによって推敲を続けなかったのか。おそらく新出本は何度も推敲を重ねてきたので、目を変えたかった、清書前に、目を変えて、気分一新、文章チェックをしたかったのではないだろうか。ただしこれは全くの憶測に過ぎない。

曽良本は「自分用の清書」（井本氏）でも、そのまま清書用原

稿にするべく写されたもの（櫻井氏）でもなかった。そしてその書込は、結果的に書き込んでしまったのではなく、始めから予定されていたものなのである。さらに、新出本が未完成本文であったこと、それを写した曽良本で芭蕉が推敲を続けていること、そしてその曽良本だけが半紙本であることを考えると、曽良本は、清書用原稿になることを前提とした、推敲継続の土台を目的として写された本だというのが、現在の私の仮説である。

その意味では、新出本と曽良本は、本来一体のものであり、新出本に全面貼り紙をして、曽良本本文が書かれていれば分かりやすかったのである。

七　おわりに

本稿は新出本が芭蕉自筆であることを前提している。しかしながら、万が一自筆でなくとも、それが芭蕉自筆の完全無欠の写しであれば何ら問題はない[40]（もちろん芭蕉筆跡集という価値は諦めなければならないが）。ただ私たちは、そんな完璧な写しはあり得ないと知っているので、まずは真偽をはっきりさせたいと思うのだ。しかし、しばらくは完全決着がつきそうにないし[41]、そう性急につけるべきではないのかも知れない。そこで、とりあえずは自筆（あるいは極めて精度の高い写し）を前提として、考えられることを述べてみた。

あるいはそれ以外にも本稿では、いくつかのことを前提としている。しかしそれらも本当は一々検討を要する。例えば諸本関係[42]。曽良本書込の筆者[43]。本当に芭蕉でいいのか[44]。また曽良本書込の朱と墨はどちらが先か[45]。墨は何回に渡るのか。曽良本はなぜ三一丁裏だけ付箋貼り紙で訂正してあるのか。あるいは柿衛本と西村本はどちらが先なのか[46]。そして決定稿に対する芭蕉の考えは。

このあたりを今後は、もっと具体的に議論していかなければならない。

新出本は、『奥の細道』推敲過程をしる以外にも、そのような議論を私たちに与えてくれるのである。

注

(1) いくつかの新聞でも「原本」と呼ばれた。例えば読売新聞・日本経済新聞・産経新聞・東京新聞など。

(2) 「曽良本『おくのほそ道』の検討」（『国語と国文学』昭和六十年八月）のち、『曽良本『おくのほそ道』の研究』（昭和六三年二月　笠間書院）。

(3) 平成九年一月二九日放送（ＮＨＫ）のＥＴＶ８のタイトルは「原本」がとれて「よみがえった自筆本『奥の細道』～芭蕉創作の秘密を探る～」。

(4) 例えば櫻井武次郎氏・田中善信氏・雲英末雄氏「《鼎談》新出本『奥の細道』をめぐって」（『文学』平成九年一月十日　岩波書店）。なお以下《鼎談》と呼ぶ。

(5) 櫻井武次郎氏稿　毎日新聞　平成八年十二月四日。

(6) 平成八年十一月　中尾松泉堂書店。

(7) 平成九年一月　岩波書店。

(8) 上野洋三氏『芭蕉自筆『奥の細道』の謎』（平成九年七月　二見書房）一八〇頁。以下『謎』と呼ぶ。

(9) 櫻井氏は「最低限度の考証と問題点の指摘をするにとどめ、多くの研究者と同じスタートラインに立って今後の研究を始めたい」（複製

解説）と述べておられるので、櫻井説と呼ぶのは不当かもしれないが、敢えてそう呼ぶ。また、極めて早い段階で、井本農一氏も、櫻井氏と同様の見解を示しておられる（東京新聞　平成八年十二月三日）。

(10) 岩波普及版解説「芭蕉自筆『奥の細道』について」。

(11) 注(10)に同じ。

(12) 上野氏によると最低八箇所（『謎』一八一頁）。

(13) 東京新聞（平成八年十一月二七日・九年二月三日）。ただし櫻井説とは呼ばれていない。

(14) 櫻井氏は、教科書については、「本文をすぐに改めなければならないというわけではあるまい」（『芭蕉自筆『奥の細道』の顚末』平成九年十月　PHP研究所　一一八頁。以下『顚末』と呼ぶ）と述べておられるが、底本修正ということは一貫して変わっておられない。

(15) 『おくのほそ道』を語る』（平成九年六月　角川書店）一二七頁。以下『語る』と呼ぶ。

(16) 「『奥の細道』行脚の謎再考」（『歴史と旅』平成九年七月　秋田書店）。

(17) 上野洋三氏もこの問題にいち早く注目された。ただし氏は自身の見解を示しつつも、問題提起にとどめておられる。

(18) 『顚末』（七十頁）。

(19) 曽良本が写し間違ったところを、書込によって新出本本文に戻した箇所という意味。本稿では始めに写された曽良本の本文を、曽良本本文と呼ぶ。

(20) これについては早くから上野氏に指摘がある（東京新聞　平成九年二月三日）。なお、『謎』一七七頁では、詳しく、新出本が、曽良本筆写者（利牛とする）から芭蕉に返却されなかった可能性を示し、自ら「楽しい空想」と呼んでおられる。もちろん一度も返却されなかったのか、返却されたにもかかわらず芭蕉はそれを参照しなかったのかは分からない。

(21) 曽良本に細かく打たれた朱の句読点や返り点なども、そのような雰囲気を私たちに伝えているように思う。

(22) この箇所、（曽込）は「閑」字を使用。

(23) 『顚末』一一八頁

(24) 『謎』一八三頁

(25) 注(20)参照。

(26) 検討会（大阪俳文学研究会）で上野氏が、新出本は何かを写したというよりは、一気に書いているということをおっしゃったが、ここの例とか、あるいは二一頁②③④などは、何かを写したときに発生する誤りのようにも思える。櫻井氏や尾形氏（『語る』一三四頁）は新出本の元になったものがあるというお考えだ。今後検討したい。

(27) 玉城司氏はこの奥書に触れて「井筒屋は芭蕉本の行方に関心を抱き、その情報を的確にキャッチしていたのである」と述べておられる（「専門書肆―俳書関係―『続猿蓑』の出版をめぐって」『国文学』平九年九月十日　学燈社）。

(28) 『謎』四七頁

(29) ただし井本農一氏が初コメントの段階で「これが『奥の細道』の最終的な形のものであるかどうかは研究しないとわからぬ」（東京新聞　平成八年十一月二六日）と述べておられる。また上野氏に「『曽良本』以降の本文のほうが完成度が高い」（『謎』一三一頁）という指摘がある。なお、井筒屋版本は、奥書にいう「文章」が、表面本文を指すはずだから、それをも含めて「草稿」と考えているのだろう。

(30) 新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』（平成九年九月二十日　小学館）。

(31) もちろん田中善信氏や雲英末雄氏（《鼎談》）、尾形仂（『語る』一三三頁）、井本氏（『松尾芭蕉集②』）が指摘するように、新出本は始

め清書のつもりで書き始められたことは間違いない。

(32) 問題がないというのは、本文修正問題に関してという意味。曽良本は「その文言を正確に写し取ろうとした営為が、いかにも謹直なまっとうな態度で行われたと認められる。この写し手は、平仮名の書体についても、底本である『自筆本』の書体を模すことを原則としている」(『謎』一六五頁)というくらい、忠実に写している。それにもかかわらず、なぜかこれらの箇所は変えて写したのである。もちろん①～⑥は明らかな誤りを直したと考えられるけれども、それは曽良本の筆者の独断によるのか、あるいは芭蕉による口頭での指示があったか。または櫻井氏指摘(『顚末』二八頁)のように、曽良本筆写の際には貼り紙が貼られていて、現在は剝がれてしまった可能性もある。そのような問題は別に残っている。

(33) 『謎』一八五頁

(34) 例えば芭蕉は死の病床にあって「なをかけ廻る夢心」と「夢は枯野を駆けめぐる」のどちらがいいか決めかねたという話があるが、現代人の感覚は、この二つの優劣について芭蕉ほどには悩まないのではないだろうか。

(35) 『松尾芭蕉集②』は曽良本を底本としたし、本稿で触れた櫻井氏、上野氏、田中善信氏らは、曽良本派。また、村松友次(紅花)氏(「芭蕉真筆『おくのほそ道』(野坡本)の出現――曽良本の位置不動に――」『雪』平成九年三月一日)は当然ながら、堀切実氏(『おくのほそ道――永遠の文学空間』平成九年十月二十日　NHKライブラリー)も、曽良本の位置が「ゆるぎないものになった」とする。

(36) 《鼎談》で田中善信氏が、「西村本に訂正がないということは、つまり間違っても直さなかったことの証明でしょうね」と述べておられる。賛成。ただし許せない誤りがあった場合、その丁ごと写し直させた可能性はある。またこの点について井本農一氏は、「芭蕉は出立前に素龍本(＝西村本――注)を丁寧に読み返す暇はなかったのではないか。丁寧に読めば素龍の明らかな誤写などはきっと訂正したくなったはずである」(『松尾芭蕉集②』)と述べておられるが、疑問が残る。井本氏は西村本の前に写された柿衛本を芭蕉は気に入らず、突き返したとされるが、そんな芭蕉が西村本をチェックもせず、題箋を書き、所持することがあるのだろうか。さらにそれが兄・去来に譲られたことはどう考えればいいのだろうか。

(37) 櫻井氏の次の指摘は興味深い。一つは、「芭蕉が鑑賞用の染筆(短冊や印を捺した懐紙)をする際、同じものを書かず、懐紙なら必ず前書の一部を変え、発句だけの短冊なら漢字・仮名の用字を変えるなどの配慮をしているようだ。」(『顚末』一三三頁)。もう一つは「素龍に清書させた本は、本文の内容よりも、本の形そのものに意味があったのではないか。古典文学を意識した造本こそが、芭蕉の意図したことであったのである」(『顚末』六九頁)。また小林孔氏にも、芭蕉は同じものを二つ作らせなかったのではないかというご教示を頂いた。

(38) 注(30)に同じ。

(39) 注(4)に同じ。

(40) この時、尾形氏(『語る』一二五頁)や櫻井氏(『顚末』一四九頁)の言われる、「貼り紙の下をどうやって写したのか」ということは写しの否定的根拠にはならないように思う。何もそっくりのレプリカを作ろうとしたのでなければ、例えば、原本は全面ではなく一部糊付で、めくって下が見れるようになっていたかも知れないし、はがしたのかもしれないからだ。いろいろ可能性はあるので、それでもって決定的な写し否定の根拠にはならない。

(41) 「自筆」説の根拠は今のところ全て出ているし、増田説・山本説には説得力がない。なお櫻井武次氏「自筆本奥の細道『ニセモノ』説への疑問」(『会報　大阪俳文学研究会』第三一号　平成九年十月十二

日）、『顚末』参照。

(42) 復本一郎氏は、新出本によって、新たな諸本関係を提示しておられる（「新出芭蕉自筆本『おくの細道』一次草稿本説――『俳諧』『誹諧』用字・用語考」『芭蕉解体新書』平成九年四月五日　雄山閣出版）。

(43) 墨は芭蕉ではない可能性があることを堀信夫氏にご教示頂いた。また小林孔氏からはもう一歩踏み込んで、墨の一部は素龍筆であるとの教示を頂いた。ただしそうだとしても、芭蕉の意志がかなりの程度反映していることは確かだと思うので、本稿の考えに大きな影響はない。

(44) 本稿では櫻井氏にしたがって、朱が先とした。おそらく朱が未だと思われる。

(45) 墨は複数あると思われる。気になるのは、一旦見せ消ち訂正した文字を、ザツに塗りつぶした箇所。これは訂正や推敲ではなく、写し間違いを防ぐためのものだと思われる。

(46) 櫻井氏は、朱と墨の後に柿衛本が写され、その後更に曽良本に墨で書き込みが行われ、それを写したのが西村本とする（『顚末』七一頁）。田中善信氏は「柿衛本は西村本の写し」（『『おくのほそ道』のテキスト――曽良本について」『国文学』平成元年五月二十日　學燈社）とされる。あるいは村松氏も柿衛本が後だというお考えのようである（『曽良本『おくのほそ道』の研究』）。

※引用部分も「曽良本」という表記に統一した。

〔附記〕

本稿は平成九年九月二一日、大阪俳文学研究会例会（於柿衛文庫）で行われた、「自筆本『奥の細道』」に関する検討会における発言を元にしている。

失礼なもの言いにもかかわらず、本稿の執筆を勧めて下さった櫻井武次郎先生、長時間の議論につきあって下さった小林孔氏に深く感謝致します。

（秋田経済法科大学短期大学部）